

ALUMNI AND ALUMNAE NEWS NO. 2

令和3年3月に、第Ⅱ期教職実践高度化専攻（教職大学院）院生が2年間の学びを終え、柳林専攻長から一人ずつ教職修士（専門職）の学位記を受け取りそれぞれの道に巣立っていきました。教職大学院では、高知県の課題解決に向け、院生それぞれ自らが設定した研究課題に沿った研究活動に邁進し大きな成果を残すことができました。

学校運営コースの黒瀬小百合さんは、「高知県中学校教育における組織マネジメントのあり方」、山崎弥生さんは、市町村教育委員会における学校への効果的な支援の在り方」、教育実践コースの上岡栄二さんは、「数学的な見方・考え方を働かせた数学的活動の充実～What-If-Not ストラテジーとZ.P.D理論の活用～」、楠目安由さんは、「理科の資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」～メタ認知能力の発揮を促す手立て開発とその有効性の検証～」、竹村理志さんは、「自己指導能力を育成する生徒指導のあり方～セルフコントロールに着目して～」、横川理水さんは、「自己の生き方について考えを深める道德の授業づくり～小学校における討論型道德授業の実践と有効性の検討」、そして特別支援教育コースの池川真妃さんは、「通常の学級における合理的配慮の在り方について～通常の学級における集団指導と個別指導の調整および複数指導者でのチーム支援の在り方の検討～」、小西留美さんは、「高等学校における主体的な学びを促進する授業の工夫～英語科の授業のユニバーサルデザインによる生徒の「参加」を目指して～」、近藤修史さんは、「子どもの発達特性に応じた「わかる」「できる」を成立させる教科指導法のあり方を探る～算数LDに焦点をあてて～」、友永しのぶさんは、「組織的に取り組む特別支援教育の在り方～発達障害のある生徒も過ごしやすい学級の仲間づくり～」、前田正博さんは、「インクルーシブ教育システム構築のための体制づくり～病弱及び身体虚弱の児童生徒の通級指導教室における指導方法について～」について研究し、それぞれの成果は各学会発表や学術論文として公表されています。

4月から現職派遣院生11名は置籍校や教育委員会等で勤務しています。ここでは、教職大学院で学んだ「理論と実践の融合」から自己成長を遂げ、高知県の教育現場の中核的存在になり、即戦力として教育現場で活躍している様子と、自ら学んだ経験を多くの教員への波及効果を目指して日々奮闘している様子を語ってもらいました。

【学校運営コース】

黒瀬小百合さん 「仲間ともに考え実践できることに感謝して」



在籍校であった高知市立城北中学校に戻り、3年団学年主任、英語科教員として勤務しています。大学院では「高知県中学校教育における組織マネジメントのあり方」をテーマとし、在学中は、現場での実践方法等について管理職と綿密に話し、現場の先生方の声に耳を傾けながら研究を続けました。現場に戻らせていただいたことで、私自身が学年会や教科会や運営委員会等において、活性化案である「学年会レジュメ」「学年目標に対する振り返り」を実際に使用することができ、やってみなければわからなかった部分を実感しながら、新たな課題に直面し実践しています。研究の3つのポイント「当事者意識」「同僚性」「マネジメントスキル」は、在学中に現場で発信し続けたことで、先生方が立ち返る視点となっています。生徒指導や学習指導要領の対応等の様々な課題に対し、忙しく大変だからこそ、子どもたちの幸せのために、職場の仲間とともに考え行動し、一緒に向かっていることに感謝しながら頑張ります。

山崎弥生さん 「教職大学院の学びを通して」



教職大学院在学中は学校運営コースで勉強させていただきました。この4月からは、高知県教育委員会事務局小中学校課に勤務しています。担当業務は、「学校経営計画」や「組織力向上推進事業」、「コミュニティ・スクールの推進」等です。各事業を通して効果のある取組について検証し、その取組を県内に広めることを主な業務としています。指導主事という立場から学校現場を見ますと、学習指導要領に即した授業改善の推進はもちろんのこと、来年度からは、小学校に教科担任制が導入される等、次々と新しい国の方針が打ち出されており、それらに対応する力が私たち教員に求められています。しかし、学校だけでは対応しきれない課題も増えてきており、地域と一丸となって学校運営を行うことが必須であると考えています。そのため、学校現場の取組の一助になるような施策を打ち出せるよう、微力ながら頑張っているところです。教職大学院での出会いと学びに感謝するとともに、今後ますますのご発展と皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

【教育実践コース】

上岡栄二さん 「教職大学院での学びを 高知県の学びに」



4月から高知県教育委員会 西部教育事務所で勤務しています。学校現場とは違う環境に当初は慣れないこともありましたが、生徒を支援することに違いはなく、業務を通して、今までとは違った視点や考え方を得ることができました。

担当業務として、中学校数学、特別活動、研究指定校への支援や学校等での研修講師等があります。これまでに経験したことのない業務もありますが、チームや上司の方々のサポートのおかげで日々を過ごすことができます。また中学校数学の授業改善プランにおいては、教職大学院で研究した What-If-Not ストラテジーを活用した問題づくりについて、各学校の先生方に伝えるとともに、今求められている資質・能力ベースの授業づくりについても、さらに研究を深めていきたいと考えています。教職大学院での二年間の学びを今後とも自己研鑽をしていき、更なる学びにつなげていきたいと考えています。

楠目安由さん 「主体的・対話的で深い学びの実現にむけて」



4月から新しい学校での生活が始まりました。勤務校では、学級担任と研究主任をしています。学習指導要領が完全実施となる「変化」の年を、大学院での2年間で得た学びやネットワークを糧に取り組んでいます。

授業では、大学院での研究テーマだった「理科授業における生徒のメタ認知能力の発揮を促す手立て」を取り入れた、仮説検証型の理科授業づくりを行っています。開発した①自己の思考の内省を促す発問の工夫、②モニタリングとコントロールを発揮する板書の工夫、③メタ認知的知識を働かせるための工夫の3つの手立てを、どの授業、単元、領域で取り入れることが効果的か。それを模索しながらの授業づくりは苦戦することもあります。生徒の思考する姿、観察・実験に見通しを持って取り組む姿を見ていると、大変やりがいを感じています。3学期に向けて、より生徒の実態にあったものにすべく、取り組んでいきます。

竹村理志さん 「教職大学院での学びを学校現場でどのように活かすか」



今年度は在籍校に戻り、主に学年主任と教務主任として勤務しています。在学中の穏やかな時間とは打って変わり、授業や部活動など分単位で業務する日常に戻りましたが、やはり生徒たちと共に過ごす日々は充実しています。そのような毎日で私が実感するのは、自身の研究テーマだけではなく、その時々在籍校が抱える中心的な課題への広範な対応力と組織マネジメント力が現場で特に要求されることです。そこには教職大学院の先生方や異校種の仲間たちから学んだ様々な知識や見聞がヒントとなることが多く、2年間の学びが大きな財産となっていることも同時に実感しています。そして、改めて現場には机上のみでは解決できない問題が山積していることを思い知らされています。そのため、立案した支援計画や指導方法について、独善的な見方に陥らぬよう、複数の視点から多面的多角的な検証を行うことを心がけています。在学中意識し続けた「物事を正しく見ようとする態度」を、これからも全教育活動で大切にしたいです。

横川理水さん 「小学校における討論型道徳授業の実践と有効性の検討～学級経営を通して～」



今年度は在籍校に戻り6年生の担任をしています。2年間のブランクは思った以上に大きく、道徳以外の授業では四苦八苦する期間が続きました。特に ICT を使った授業は生きた化石状態で1からのスタートに戸惑いが多かったです。日々後輩たちに習いながらなんとか追いつこうとしている最中です。道徳科では昨年の研究結果から、討論型道徳授業は児童にとって自己の生き方について考えを深めるために有効であることが示唆されました。

そこで今年度は、学級経営を通して道徳授業を行い、日々の生活や他教科と関連付けるこ

とで、さらなる道徳授業の質の高まりを目指して実践に取り組んでいます。関連付けを意識することによって、これまでの研究の視点とは違った展開や揺さぶりの発問が生まれてきています。

また、他教科との関連を図ることによって、児童の物事を見る目線が少しずつですが多面的・多角的に見られるようになってきました。引き続きクラス子ども達と討論を重ね、考え、議論する道徳授業を目指しがんばってまいります。

【特別支援教育コース】

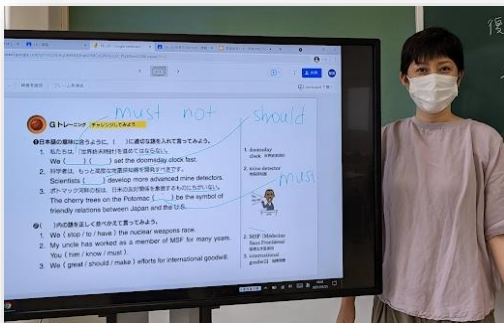
池川真妃さん 「支援を引き継ぐために、見通しを持ったコーディネートを」



本年 4 月より南国市教育委員会事務局学校教育課に勤務しています。これまでの学校現場とは違った、経験したことがない業務もありますが、同僚や上司の方々のサポートのおかげで毎日を過ごすことができている。現在担当している業務は、主に特別支援教育関連の事業を担当させていただいています。就学に向けて保育園（所）や幼稚園へ出向き保護者ともかかわらせていただく中で、見通しを持った支援とは何かを考えさせられることが多く、支援を継続していくこと、また、小中学校への支援の引継ぎの重要性を改めて実感しています。

今の職場で得られている新たな視点や考え方や教職大学院での学びを、さらに融合させ深めていきたいと考えています。末筆ながら、先生方をはじめ院生皆様のみまますのご発展とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

小西留美さん 「Google Workspace を活用した授業展開は、発達障害を有する生徒の授業の参加と理解を促すことができるか」



高知県立城山高等学校にて、1 年生担任、総務部、英語科教諭、卓球部副顧問として働いています。本校では Google Workspace を活用した授業実践が盛んに行なわれております。実際の授業で使用した UD に配慮した資料や教材が、いつでもインターネット上でアクセスできるようにしています。成果としては、授業時に操作が容易であれば授業への参加のしやすさが促進されることと、生徒が欲しい情報を主体的に得ようとする態度が見られることです。課題は生徒が操作に不慣れであるため授業の進捗が遅くなりがちになること、衝動性の高い生徒は授業に関係のないアプリを使用し授業に参加できなくなることです。

授業・教材の継続的な改善および個別指導に消極的な英語ディスレクシアの様相をみせる生徒への教材作成が急務かと思われまます。

近藤修史さん 「どの子どもが過ごしやすく学びやすい学校生活・授業づくりをめざして」



本年度より在籍校に戻り、第 6 学年の算数専科、通級指導教室担当及び不登校対応等の校務分掌を担当しています。教職大学院での 2 年間は、主として算数困難児童に対する学習指導法や、個別指導と一斉指導の機能的な関連を図る段階的支援の具体化に向けた理論研究・実践研究に取り組みました。そこで得られた知見は、算数科の授業づくり、認知特性を活かした個別指導（通級指導教室）及び多角的な実態把握をもとにした登校支援等において大いに活かされています。特に、通級指導教室では、心理検査をはじめとする客観的な評価をもとに、科学的な視点から指導法を考え実践しています。ユニバーサルデザインの視点を活かすことはもとより、個に応じたオーダーメイド的な支援は、全ての子どもの「わかる」「できる」につながると考えます。

今後も「子ども一人一人の学びのスタイルを知り、強みを活かす」、「子ども同士をつなぐ」等といった指導観を明確にもちながら、実践研究を重ねていきたいと考えています。

【特別支援教育コース】

友永しのぶさん 「特別支援教育コーディネーターとして、すべての生徒が安心できる居場所づくりを」



今年度は学級担任、部活動顧問に加え、特別支援教育コーディネーターとして、教職大学院で学んだ内容を勤務校に返すことができると努めています。行動の裏には発達障害が潜んでいるかもしれないという視点で生徒を見ると、授業等の手立ての少なさに気づかされます。常に「エビデンスベースで考える」ということを頭におき、主観ではなく本当に生徒のためになる具体の支援を考えるようにしています。

以前とは全く違った視点で生徒を見ることができるようになり、大学院での2年間は私の教員人生の大きな財産となりました。勤務校をはじめ、近隣校で研究内容を広める講師をする機会もいただくようになりましたが、通常学級において個別の教育的ニーズのある生徒は年々増加しているにも関わらず、まだまだその理解や支援は十分ではないことを痛感させられます。今後も大学院での学びを自分だけのものにせず、たくさんの子どもたちの居場所づくりができるように発信していきたいと考えております。

前田正博さん 「高知江の口特別支援学校：病弱特別支援学校における ICT を活用した通級指導教室の実践」



現在は高知江の口特別支援学校で通級指導教室の担当をしています。昨年度まで研究で取り組んできたことをそのまま現場で生かすことができています。研究の時とは違い、在籍校や保護者との連携を自分から発信していかなければなりません。研究の中でも課題として「在籍校との連携」をあげていたため、その課題について実践の中で取り組むことができている。今年度から2年間「ICTを活用した自立活動の効果的な指導の在り方の調査研究」の事業を通級指導教室が受けており、遠隔システムを活用したアセスメントや支援会議、自立活動の指導の取組について研究を行っています。コロナ禍のこともあり、対面での活動が制限されている中で遠隔システムを活用することは時代のニーズに合った取組です。

遠隔システムを活用することで、いつでも学習の記録等の情報を共有することや、移動時間のことを考えずに支援会を行うことができました。しかし、支援会議のコーディネートの仕方や自立活動の指導の実践、評価等には課題があります。今後もICTを効果的に活用した自立活動の在り方について実践しながら研究していきたいと思っております。

【在院生へのメッセージ】

私たち第2期修了生11名は、在学期間中の様々な課題についての協働や互いの研究の相互評価などを通して、信頼関係を深めることができました。M2になる春頃からはコロナ禍に突入し、その後は制限された学生生活を送る日々が続きましたが、久しぶりに11名が揃う日は、互いの研究の進捗状況や相互評価を繰り返し、最後はいつも笑い合っていたことが思い出されます。「本当に良い仲間になった！」と11名全員が実感しています。在院生の皆様も、思うような活動ができない日々が続いていることと拝察します。そんな状況下でも、互いの立場を押し量り尊重し合うことを前提に、仲間同士で多面的多角的な視点から様々な議論を深めた時間こそが、きっと今後の皆様の教員生活を支える糧になると思います。大変貴重な2年間です。大学院の先生方や縁あって同じ時間を共有することになった仲間たちと、どうぞ絆を深めてください。

Editorial note: 第2期修了生は、新型コロナ禍という試練の中、単立ちを迎え、自身の研究の歩みを続けています。修了後、人間的にも成熟し、心のしなやかさを鍛え、それぞれの活動に邁進している様子が伝わってきました。

教職大学院で学んだことを生かしながら、高知県の子どもたちの健やかな成長のために、それぞれの立場で、さらなる活躍を祈っております。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 柳林信彦
 編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニュースレター委員
 発行日：2021年11月10日
 事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター
 〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1 (教職大学院係)
 TEL 088-844-8457
 E-mail ks33@kochi-u.ac.jp